

自然誌 だより

Natural history

三重自然誌の会情報誌 136号

2023年 6月

トノサマガエルの受難

暖かく、雨の少なかった今春、田植え時期の農家の人たちから、水不足を嘆く声も聞かれました。そのようななか、一週間ぶりにまとまった降雨が4月15日にあり、一息ついたことでしょう。でも、雨を待っていたのは農家の人たちだけではなく、カエルたちも産卵する機会をうかがっていたようです。降雨翌日から気温も上昇し、連日20℃を超える日が続く陽気に誘われて17日、近所に散歩に出かけました。山すそと水田の間にある農道を通りかかった時、道脇につけられた幅・深さ1mほどのコンクリート水路の中にトノサマガエルがたくさん落ちているのを発見しました。この水路は、上のため池から八重田池に導水のために設けられており、この時期は水が流れているのが普通ですが、この時は水がほとんどない状態でした。そのため、トノサマガエルは水路に落下して取り残され、分水口までの約300mの間に、抱接した個体約30、単独個体と死亡個体各約10匹を確認し、生きたカエルは救出し水田側に放しました。23日に再び歩いてみると、カエルはきれいになくなっており、水の染み出た分水口にメス1個体がいただけでした。アライグマやタイリクイタチ、ノネコ等の生息する地域ですので、死体等は彼らに片づけられたのでしょう。毎年同じことを繰り返しているのならとくに消滅しているでしょうから、この受難が今年限りであることを願っています。



写真 1；水路（左手が水田，右手が林，奥に八重田池がある），2；抱接個体，3；死亡したメス，4；分水口付近に集まった個体。

（清水 善吉：松阪市日丘町 1386-17）

アオサギが群れ飛ぶコロニー

今 堀 聖 史

アオサギは、田や河川、干潟などの水辺で1羽が佇んでいるのをよく見かけます。ところが、繁殖期は数十羽から時には百羽以上の群で営巣します(全国的な調査では数百羽の営巣地もあります)。拙宅から見える小さな丘に今年はアオサギが100羽以上とダイサギ、コサギ、ゴイサギなど数十羽が営巣しました。残念なことに、コロニーに近い道路や公園からは茂った樹木で巣の様子を見ることはできませんが、餌を運ぶ親鳥の姿やヒナの騒がしい鳴き声が聞こえてきます。3月中旬から4月上旬にかけて、サギ類の大群が朝夕飛翔する光景が見られましたので紹介します。

コロニーがある小さな丘は、津市の南東(御殿場海岸から2km、雲出川から4km)、住宅団地と田圃に囲まれた小さな林です。林の東側は孟宗竹、西半分は雑木林で、丘の斜面に「南ヶ丘野鳥公園」があり、海拔高度は高いところで50mです。アオサギが営巣するのは雑木林の上部、ダイサギなどは雑木林の中層や竹林を多く利用しています。

3月になると巣を作り始めるアオサギが見られるようになり、中旬には数十羽の群が巣作りを始めます(写真1)。この時期は群の個体数が増え、朝夕に林の上空を群れ飛ぶようになります。朝は8~9時すぎに群れ飛び、その後は四方へ飛び去っていきます。夕方は日によって時刻が違いますが午後3~4時頃が多く、三々五々戻ってきた個体が雑木林上部に集まります。その後、群が飛び立ち、しばらく上空で旋回して林に降りていくので「ねぐら入り」と考えていいようです。

しかし、アオサギが群れで飛ぶのは4月上旬まで、その後はピタッと飛ばなくなります。4月中旬になると緑濃くなった雑木林を背景に白いダイサギやコサギなどが目立つようになり、林の中層まで巣があつて絶え間なく飛んでいます。アオサギが群で飛ばなくなったのは巣作りに忙しくなったからだろうと推定できます。

では、3月中下旬に大群が飛翔していたのは何故かと気になって調べても、素朴な疑問に答えてくれる資料は見当たりません。ふと推測を思いついたのは強風が吹く日のことでした。2mありそうな巣材を咥えて揺れる樹冠に止まり、羽ばたいてバランスをとりながら下方の巣にいる相棒に渡そうと苦勞している様子をスコープで見ていた時です。

翼を広げると170cmほどもあるアオサギが林内に巣を作り、ヒナに餌を運ぶために林の中を飛び回る状況を想像すると、「慣れ」や「修練」が必要ではないかと考えました。営巣する林の広さに対して群れの個体が増えて密度が高まったとき、群れ飛ぶことが林の空間での飛翔に役立つと思いました。コロニーの個体密度が高くなると群で飛ぶ習性にスイッチが入るとすれば納得できます。普段は個で生活している鳥が繁殖のときに群になるのは理由があるそうですが、アオサギのヒナの生存率は低いことと関係あるのかもしれませんが。



写真1 アオサギのコロニー (津市南ヶ丘, 2023年3月30日)



写真2 コロニーの上空を群れ飛ぶアオサギ (同, 2023年4月5日)

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町 1454 - 30)

池ノ谷のモリアオガエル産卵状況－2023年

宮 島 美 栄

記録的な暖かさとなった今年の3月、軒並み日中20℃越えの4月下旬並みの気温が続き、ソメイヨシノもたまたま3月中旬に開花、そしてまた、満開までの日数も記録的な速さとなり、必然散ってゆくのも早かった。そしてヤマザクラもツツジも他の草花も例年順々に咲いていくものが、もう一気！一気に全てが咲きそろい、終わっていった。そんな今春、モリアオガエルも気が早くなっているだろうか、と3月24日に池ノ谷（大台町桧原）を訪れた。

まだ、池の水は溜まっておらず（写真1）、モリアオガエルは産卵してもおたまじゃくしが生き延びる術はない。やはり彼らもよくわかっている、卵は一つも確認できなかった。4月19日、4日前に大雨が降り、池には水が溜まりだしたのでは、と観察に行った。満水まではいかないがある程度溜まっている。そして鳴き声はしている、しかし、卵塊は観られなかった。

一月後の5月22日、この日は季節外れの暑さが治まり清々しい五月晴れの日、モリアオガエルは鳴いている、そして卵もあった！15個（写真2）。去年は5月30日に30個確認できている。また月末に来てみることにする。

ここで今年1月から4月の気温と降水量の値を平年値と比べてみたい（表）。大台のデータがなかったので、紀伊長島のデータだ（池ノ谷は山を越えれば紀伊長島なので問題ないだろう）。

やはり3月の気温が異常に高いし、4月もかなり高い。一方、1～2月の降水量の少なさはどうだろう。これは推測であるが、春先の少雨が池の水の溜まりを遅くし、3月急に大雨になっても、それは変わらない（昨今のゲリラ豪雨的な降り方では雨は地中まで浸み込まないからだ）。もし、1～2月の極端な少雨がなく平年並みに雨が降っていれば、この記録的な高温のなか、4月にはもう産卵があったかもしれない。

また来年も継続観察だ。最後に5月29日の状況を報告する。池の水は先週より減っていたにも関わらず、卵塊37個（これは5/22観察分の15個も含まれる）（写真3）。

表 1～4月の気温、降水量の比較

月	気 温		降 水 量	
	2023	平年値	2023	平年値
1	6.3	6.2	25.5	70.9
2	7.9	6.9	26.0	80.0
3	12.3	9.8	196	164.3
4	15.7	14.3	187.5	207.3



写真1 3月24日の池ノ谷



写真2 5月22日の池ノ谷



写真3 5月29日の池ノ谷

（みやしま みえ：大台町上三瀬52-1）

サソリガイにしばれた日 ～三重県におけるサソリガイの生息記録～

中 野 環

サソリガイ *Lambis crocata* (Link, 1807) は、紀伊半島以南、熱帯西太平洋に分布し、水深20mまでのサンゴ礁などに生息する巻貝です。殻長は150mmほどで、外縁には7本の長い棘があり、殻口は鮮やかな橙紅色をしています(奥谷2017)。紀北町紀伊長島の水深10～30mに仕掛けられたイセエビ刺網漁でサソリガイを得たので報告します。

2023年4月23日の午後、週末の楽しみである採集に紀伊長島まで足をのばしました。イセエビ刺網漁の漁期が終盤ということで操業数は少なかったのですが、漁労屑の中に見慣れないフォルムの貝を見つけました。貝の背面には海藻やコケムシ類が付着していましたが(写真1A)、直ぐにサソリガイだと判り、興奮のあまり思わず呼吸が激しくなりました。手を伸ばして貝を取り上げて腹面を見ると殻口が鮮やかな橙色をした生きた個体です(写真1B)。あまりの美しさに体に衝撃がはりました。節足動物のサソリに刺されると、しばれたり、呼吸が困難な状態に陥ることがあると言われますが、私は生きたサソリガイを手にして心が激しくしばれました。

採集した個体は、殻長110.98mmで、標準個体(奥谷2017)に比べると小さく、亜成貝のため棘が完成していませんが、軟体部を除去して貝殻に付着する海藻をブラシで擦ると艶のある美しい模様が現れました(写真2A, B)。

サソリガイは暖かい海域に生息する種類で、和歌山県では生きた個体が確認されています。三重県では志摩市志摩町和具(松本1994)と紀北町紀伊長島(中野・中 2018)から記録されています。和具の個体は山下信夫氏によって水深20mのところから採集されたようですが、採集日等のデータや標本の所在に関しては不明です。紀伊長島の個体は、筆者が2009年12月2日に採集したヤドカリが背負っていたものですので(TNC-Mo.13988)、三重県では、生きた個体が得られたという報告はないようです。三重県近海に黒潮が接近している影響なのか、数年前からホソスジウズラタマキビ、キバアマガイ、アカイガレイシ、ニシキウズ(アナアキウズ型)など生息域の中心が南方にある種類を確認しているので(中野2022等)、サソリガイも三重県近海で繁殖している可能性があります。次年度のイセエビ刺網漁のシーズンに第2、第3のサソリガイの生きた個体が得られるのではないかと楽しみです。

引用文献

松本幸雄1996. 「三重の貝類」追加目録. 三重動物学会誌, 17: 213-215.

中野 環・中 優2018. みえ生物誌－貝類－. 三重自然誌の会, 205pp.

中野 環2022. アナアキウズは三重県の海岸で普通に見られる種類になるだろうか?. 自然誌だより, 132: 4-5.

奥谷喬司(編著) 2017. 日本近海産貝類図鑑 第二版. 東海大学出版部, 1375pp.

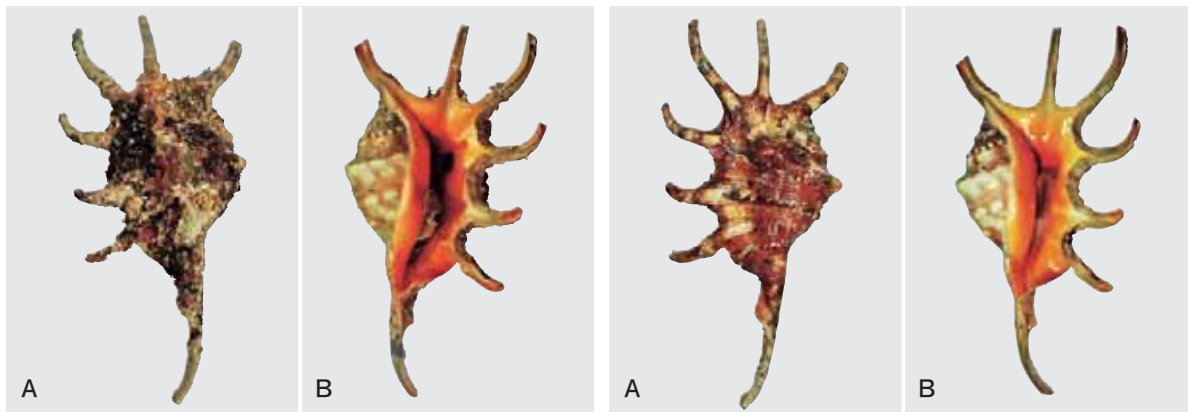


写真1. 付着物および軟体部除去前

写真2. 付着物および軟体部除去後

(中野 環: 度会町大野木1711-1)

南伊勢町のモリアオガエルその2

中 優

私が南伊勢町伊勢路のモリアオガエルについて初めて報告したのは2010年の自然誌だより84号であった。私の実家は南伊勢町押淵にあるので、モリアオガエルの産卵を報告した池はその横をそれまで何度となく通っていたが、その報告まではモリアオガエルの産卵を認識したことはなかった。報告した2010年以降は毎年産卵の時期には、産卵実績のあるサニー道路（県道719号）の鍛冶家トンネルから倒産した養鶏場までの区間を通過する機会があれば、運転に気をつけながら卵塊の有無を確認してきており、それは現在まで続いている。

その結果、伊勢路では次の表に示した4ヶ所の産卵場所があることが判っている。

表 伊勢路のモリアオガエル産卵数2023

地 点	場 所 の 概 要	今年初めて 産卵を確認 した日 * ¹	産 卵 数 * ²	備 考
A	鍛冶家トンネルを南伊勢町側に抜けた山側	4/30	49	サニー道路山側の排水路には上手い具合に山からの土砂でせき止められた湛水域が形成されており、4ヶ所の内では最多の産卵がある。落下したオタマジャクシを狙うニホンイモリを複数見かけるが、食害が問題にならないほどオタマジャクシの数は多い。
B	倒産した養鶏場の鶏糞処理場近くのサニー道路の山際（写真1）	5/21 （写真2）	5	昨年初めて産卵を確認
C	地点Dの池の伊勢市側手前を山側に入ったところにある浅い池	5/28 * ³	5	2010年の私の報告を受け、現地の周辺を調査した清水善吉さんが確認した場所
D	自然誌だより84号で報告した池	5/3	15	近年の産卵数は2010年当時より少なくなっている。最近では産卵に来た成体を狙っていると思われるアオサギを見かけたことがあり、今年は池の水面を泳いで移動するヤマカガシを確認した。

*¹ 毎日確認しているわけではない。*² 2023/6/3時点の数（痕跡を含む）。*³ 車上からは確認できない場所なのでこの確認日となっている。



写真1 地点Bの様子



写真2 地点Bの卵塊

ふるさとの大切な生き物である彼らを、産卵を通してこれからも見守っていくつもりでいる。

（なか まさる：伊勢市小俣町本町1284）

ダニによって睾丸が消えた日

清水 善吉

ダニによる人身被害が増加しているようです。鹿や猪の人里への侵入と無縁ではないでしょう。私も、ネズミ調査を20代前半から40年ほど続けていますので、つつが虫病くらいは知っていましたが、本誌前号の編集後記で触れた被害をきっかけにダニ症例についてネットで調べてみました。

すると、つつが虫病以外にも、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）や日本紅斑熱、ライム病、マダニ媒介性の回帰熱などが症状とともに紹介されていました。ネット万能、チャット GPT に質問すればなんでもわかる！というご時世ですが、ネット社会の警鐘にもなり得るダニ被害を再び経験しましたので、フィールドワーク仲間の皆様（男性だけですが）と共有しておきたいと思います。

発端は、本年3月19日夜の倦怠感や食欲低下、腹痛、下痢、膨満感、陰部周辺の痒み発症から始まります。翌朝から徐々に軽減していったのですが、ふたたび23日午後に倦怠感や食欲低下、腹痛、下痢、膨満感、陰部周辺の痒みが再発、腹部周辺に発疹がでました。翌朝、発疹は治まりましたが腹痛等は軽くなるものの続いていました。そして、少し前から右の睾丸なくなっていることにうすうす気づいていました。

睾丸がなくなるのは、いくつになっても男性にとって一大事ですので（ピン球で代用できるものではない）、念入りに確認しました。当初は、象皮化した場所（後にダニが咬まれた場所と判明）を触って、無くなっていないという期待もあり、萎縮したものと判断していました。が、第三者（残念ながら妻）にも確認してもらい、ないという結論になりました。

そこで、ふたたびネットの登場です。睾丸・消失で検索し、いろいろな設問に回答していくと行き着いた病名は「肝硬変」でした。思い当たる節も無きにしも非ず、であることから、人生の楽しみの一つを断念せねばと観念していました。悶々とした日々を送っていた26日、旧知のM医師にお会いする機会があり、「タマがなくなった」話をしてみると、上にあがっているのではという見解で、たしか肝硬変には無回答だったように記憶しています。

26日は名張で送別会があったので、出がけ前にトイレに行くとなんと、陰囊の右側に丸々としたダニが咬みついているのではないですか。ワセリンを塗って窒息死させてから、ピンセットでつまんで時計回りに軽く回転させながらゆっくりひくときれいに抜けました。この時16時30分。そして、肝硬変もタマなしもすっかり忘れて上機嫌で帰宅し、風呂にはいって陰囊を触ってみるとなんと、タマが復活しているのではないですか。この時、21時30分。翌朝には、咬口にやや痒みは残るものの、腹痛等はすっかりなくなっていました。

この経緯からみると、ダニによる感染症であることは明らかなです。睾丸消失以外の症状は、上の SFTS に合致しています。私の場合、倦怠感や腹痛よりも睾丸消失がより重大な症状であったために、肝硬変という誤った結論に至った訳です。ダニによって、このような症状もあることを皆様に知っていただきたいとともに、ネット情報だけを鵜呑みにすることの危険性も喚起したいと思います。知られていない症例でしょうから、病院へいってもむづかしいところです。なお、ダニは3月9日に鈴鹿市で実施したヤマトサンショウウオ調査時にもらったと推定されます。

M医師は、医師として当然のことながら興味を示し、タマがなくなった状態やダニが咬みついている写真がないかと要望があり、後者は撮ってあったのでお送りしました。本誌にも掲載しようかと思ったのですが、退会者が続出するとよくないので止めました。また、写真をみたM医師から「ダニは飽血しているので種類はわかりかねますが、チマダニ類（フタトゲチマダニ、キチマダニ）ではないか」というコメントがありました。標本を残していますので、同定していただける方をご存じでしたら紹介していただければ幸いです。

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

遙かなる平倉演習林

清水 善吉

平倉演習林は、三重大学生物資源学研究科附帯施設演習林が正式名称で、津市美杉町川上地内にあります。雲出川の最上流、平倉川流域にあることから平倉演習林と通称され、面積460haのうち天然性林が6割を占め、県内唯一の生物多様性を誇っています。

私は、1988年から1990年にかけて、管理棟の近くの歩道にセンサーカメラ1台を設置し、通過する動物の調査を実施しました。当時は、今のような安価で耐久性・高機能なセンサーカメラはありませんでしたので、自作しました。防水対策等、いろいろと問題はありましたが、一番の難関はストロボ等の電源



写真1 1990年前後に設置したセンサーカメラ

をどうするかでした。管理棟から電気を引く許可をいただきましたが、各機器の電圧に変換する必要があります。ストロボは単3電池4個で6ボルトなので、6ボルトの変圧器につないだら、ストロボが発熱し臭いとともに液漏れがしました。これを2回繰り返して、2台のストロボをダメにしてから、電圧をはかったらなんと9ボルトが出ていました。変圧器を4ボルト用に変えたらちょうどよく、電池の心配から解放されました。それでも、今のようにデジカメではなく、フィルムカメラであったので、月1回程度の交換は欠かせませんでした。3年間にわたって調査を行い、写った動物のコマ数を一覧にすると、ノウサギが最多であり、また、今では信じがたいですがニホンジカは一度のみでした。

ところで最近、ノウサギを見なくなったということも言われており、シカの増加と関連が疑われています。そこで、同じ場所・条件で調査を行い、30年前のデータと定量的に比較しようと計画し、平倉演習林に調査申請したところ下のような回答がありました。

【回答】

当演習林の哺乳類相についてご興味をお持ちくださりありがとうございます。当演習林では、1979年の報告以降、長らく哺乳類に関する観測は行っておりませんでした。しかし、近年、赤外線反応式自動撮影カメラ（カメラトラップ）を用いた生物相の撮影観測を業務として進めております。その結果の一部は、次の出版物にまとめられております。清水さんがご計画の1点観測よりも広範囲での観測結果ですので、演習林におけるより正確な哺乳類相の把握ができていますものと思います。カメラトラップを用いた、複数地点における定点観測は今後も継続を予定しております。その観測結果は、随時公表するつもりでおります。

清水さんが、1988年4月から1990年3月にかけて行われた、カメラトラップによる定点観察結果は大変貴重だと思います。今後公表された場合は参照させていただきたいと思います。一方、カメラによる哺乳類相の観測は当演習林の業務ですので、清水さんが過去に撮影観測されたこの地点での観測を新規に始めることも検討の余地があると思います。また、県全域を対象とした哺乳類相のカメラトラップによる観測を計画される場合、当演習林も参画する可能性がございますので、ご検討ください。

令和5年4月21日

三重大学生物資源学研究科附帯施設演習林長

演習林で調査された報文3篇も送っていただきましたが、私の調査目的と合致しない内容であったので、電話でその旨を伝え、不許可の理由を訊ねると「当演習林は、本学の教員のみの研究施設」であるとのことでした。今時!!と思いましたが、林長さんの方針であれば仕方ありません。しかし、かわった回答文ですね。

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

三県交流フィールドワークー北海道大学和歌山研究林

同研究林は、北海道大学北方圏フィールド科学センター森林圏ステーション和歌山研究林が正式名称で、古座川町平井にあります。古座川支流平井川の最上流域に位置し、面積447haのうち天然林は25%ほどです。研究林本館は集落内にあり、1927年建設の木造建築が和歌山県の登録有形文化財に指定されています。

今回のフィールドワークは6月10-11日に、本館を宿舎として研究林の見学・調査等を、米バックネル大学の一行も含めて23人の参加で行いました。12時に集合し、出発前に、私が未明に捕獲したオオサンショウウオの計測を見てもらった後、研究林のマイクロバスに乗って出発しました。研究林の動植物について、岸田治林長や伊藤欣也林長補佐はじめスタッフの皆さんの案内のもと、巣箱を用いたヤマネ調査の解説やオオダイガハラサンショウウオの幼生観察を行いました。また、モノレールを使っていっしょに尾根筋まであげてもらい、植生の移り変わるようすを体感することができました。心配された雨も帰路につくまで持ちこたえ、1日目のフィールドワークを楽しく終えることができました。

午後6時から、伊藤先生の北大研究林のあらまし、岸田先生による「エゾサンショウウオとエゾアカガエル+外来種アズマヒキガエルの食うー食われるの生存戦略」というたいへん面白い講演を聞かせていただき、7時から時間無制限交流会に突入しました。若者の参加もありましたので、彼らにも発言機会をと思うのですが、飲むほどにオヤジ方の声がかくなり、私もその張本人ながら、改善せねばと強く感じたいです。

2日目は朝から雨でしたが、予定通り百間山溪谷の遊歩道を散策し、雨を喜んでいるアカハライモリやナガレヒキガエル等を観察することができました。昼過ぎに登山口に戻り、やや遅い昼食をいただいて解散しました。

次回は奈良県で実施の年ですが、同県からは今回も参加者はなく、受け入れ団体も休眠状態となっていますので、たぶん三重で実施することになると思います。ご参加ください。



左；研究林本館前で（細田徹治氏提供）、右；バックネル大学生のモノレール体験（怖かった）。

（清水 善吉：松阪市日丘町1386-17）

編集後記

大学演習林の方針もいろいろです。岸田先生によると、北大研究林の中にも研究に特化した場所もあるとのこと。ただ、演習・研究林の存続については厳しいものがあり、和歌山研究林は地域公開・教育に力点を置いているとのことでした。平倉演習林は学内の先生方の研究にその存続をかけていることになりますので、相当なご負担と察せられます。原稿の集まりが悪く、拙文をたくさん掲載する羽目になってしまいました。9月発行予定の夏号への投稿をお待ちしています（善）。

自然誌だより136号 Mie Natural History Research Group News, No.136

発行日 2023年6月30日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp